美術専攻 立体芸術研究領域

ウエムラ イブキ

# 上村 唯蕗

## 人見酒

石粉粘土

# 人見酒

彼らは何者か？

　人形とは一体何か。

　人間を模した造形、彫刻ではない立体。ある時は身代わりに、ある時は子供の玩具に、ある時は呪詛にさえ用いられる。

　彼らは常に人間に従順であり、人間の望む通りの役割を全うしている。恐怖の対象にも、信仰の対象にも、友人にも恋人にもなる。それは人がそう望み、その役割を与えるためである。つまり、人間が存在する限り人形は望まれるまま何者にでもなり得るといえるだろう。

　私はこうした人形のもつ可能性について探り、人と人形とが永く共存し続ける世を目指して制作を行っている。

「人見酒」は、人間を見ながら宴会を楽しむ人形の様子を表現した作品である。人間ほどの大きさをした 2 体の人形たちは、我が物顔で展示室に敷物を敷き、作品鑑賞に訪れた鑑賞者たちを酒を飲みながら眺めている。その様は、人間が花や月を見る姿とよく似ている。

　彼らは天人のようないでたちでありながら、その仕草は高貴さとは程遠く俗っぽい。それでいて、どこか品のある顔つきをしている。そしてその耳は、見るからに人のそれとは異なる形をしている。

「人見酒」に登場する 2 体の球体関節人形は、私が人形と関わる上で軸となっている「人形と彫刻の境界はどこにあるのか？」という問いをもとに、塑像彫刻の制作技法である石膏による型取りを利用し、一つの型から 2 体を複製し制作している。即ち、彫刻の作り方を応用して作られた立体造形である。

　さて、彼らは人形と呼ぶに相応しい造形と言えるだろうか、はたまた、彫刻と呼ぶべきであろうか？

　広い展示室のある一点で、「見る」「見られる」の立場が入れ替わる。ちぐはぐな見てくれの彼らは、まっすぐ鑑賞者を見つめている。あまつさえ、それを肴に花見の如き宴を開いている。

　問う。その瞬間、鑑賞者にとって目の前の彼らは一体何者であったか。